

主な出展リスト

『コッペリア』

- ◆ 写真（署名入りキャビネカード）／『コッペリア』振付家アルチュール・サン＝レオン／フランス／署名1861年（PH-CC-025 ws）
- ◆ 写真／『コッペリア』／コッペリアとコッペリウス／オリガ・レバシンスカヤ&アレクサンドル・ラドンスキー／ロシア／1950年代頃（PH-D-141）
- ◆ 舞踊譜／『コッペリア』／イタリア／年不詳（SC-27）
- ◆ 書籍／『コッペリア：パレエの物語』／著：サンディ・ボスター／装丁：ジョイス・ミレン／イギリス／1949年（初版1945年）（BK-0389-pie）
- ◆ プログラム／『コッペリア』／上海音楽協会主催／ライセウム劇場／中国／1944年10月（小牧正英：3幕『戦争の精』出演）（PR-427-HP）

『人形の精』

- ◆ 楽譜／『人形の精』／オーストリア／1888年頃（SC-48）
- ◆ 食品『Liebig』トレーディングカード／『人形の精』／イタリア／1890年代頃（CB-05-01～06）
- ◆ 葉書／『人形の精』／レオン・バクスト画／ロシア／1903年（PC-COS-01）
- ◆ 写真（署名入り）／アンナ・バヴロワ／『人形の精』／1914年頃（PH-D-196-08ws）
- ◆ 参考：プログラム／『人形の精』／ウィーン国立歌劇場1997～1998シーズン／オーストリア／1997年（提供：古後奈緒子）
- ◆ 参考：台本（複写）／『人形の精』／ウィーン帝立・王立宮廷歌劇場／オーストリア／1889年（提供：古後奈緒子）

『風変わりな店』

- ◆ プログラム／『風変わりな店』／パレエ・リュス／パリ・オペラ座／フランス／1919～1920年（PR-BR-0F-41）
- ◆ 書籍／『風変わりな店』／シリル・ボーム著／ロンドン／イギリス／1919年（BK-0215-pie）
- ◆ 写真／『カンカン人形』／アレクサンドラ・ダニロワ&レオニード・マシーン／1934年頃（PC-W-003）
- ◆ プログラム／『風変わりな店』／パレエ・リュス・ド・モンテカルロ／コヴェントガーデン劇場／イギリス／1935年（PR-BRMC-0F-22）

『ペトルーシュカ』

- ◆ 葉書／『ペトルーシュカ』に扮したワツラフ・ニジンスキー&イーゴリ・ストラヴィンスキー／1911年頃（PC-PH-03）
- ◆ 写真／『ペトルーシュカ』／プロニスラワ・ニジンスカ／1930年（PH-D-183）
- ◆ 限定書籍／『ダンサー、ワツラフ・ニジンスキーのデッサン』／画：ジョルジュ・バルビエ／序文：フランシス・ド・ミオマンデル（訳：シリル・ボーム）／イギリス／1913年（AB-05）
- ◆ 切手／ミハイル・フォーキンのパレエ『シェエラザード』『火の鳥』『ペトルーシュカ』／ロシア／1995年（ST-BL-67-4）
- ◆ プログラム／音楽と交響舞踊公演『ペトルーシュカ』／上海音楽協会主催／ライセウム劇場／中国／1944年6月（小牧正英：主演）（PR-426-HP）
- ◆ 書籍／『ペトルーシュカ』／シリル・ボーム／イギリス／1919年（BK-219-pie）

主な参考文献・資料

- ◆ アイヴァー・ゲスト『パリ・オペラ座パレエ』鈴木晶訳／平凡社／2014年
- ◆ 芳賀直子『パレエ・リュス その魅力のすべて』国書刊行会／2009年
- ◆ 平林正司『19世紀フランス・パレエの台本』慶應義塾大学出版会／2000年
- ◆ DVD『Dances Diaghilev』Paris Opera Ballet／Nonesuch／1992年

関連情報

薄井憲二パレエ・コレクション第25回企画展
【人形たちの饗宴Ⅱ】および関連事業を企画中!

2020年9月～11月頃に開催予定です。
詳細は追って公開いたします。どうぞご注目ください。

Kenji Usui Ballet Collection

Fest of Dolls I ～looking into the mirror～

2020/2/11(Tue.)～2020/3/15(Sun.)
(休館日はwebでご確認ください／最終日18:00終了)

◎ 企画・監修

関典子(せき・のりこ)／薄井憲二パレエ・コレクション・キュレーター)
Noriko Seki (Curator of Kenji Usui Ballet Collection)
舞踊家・振付家・舞踊研究者。幼少よりクラシックパレエを学び、18歳でコンテンポラリーダンスに転向。お茶の水女子大学大学院博士後期課程を経て、現在、神戸大学大学院人間発達環境学研究所准教授。日本ダンス評論賞・兵庫県芸術奨励賞・神戸市文化奨励賞等受賞。

◎ 協力・解説

古後 奈緒子(こご・なおこ)
Naoko Kogo
舞踊研究者。京阪神の上演芸術のフェスティバルに記録、批評、翻訳、アドバイザー等で関わる。現在、大阪大学文学大学院文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論コース所属、准教授。

若林絵美(わかばやし・えみ)／薄井憲二パレエ・コレクション・アシスタントキュレーター)
Emi Wakabayashi (Assistant Curator of Kenji Usui Ballet Collection)

後藤俊星(ごとう・しゅんせい)／薄井憲二パレエ・コレクション・アシスタントキュレーター)
Shunsei Goto (Assistant Curator of Kenji Usui Ballet Collection)

兵庫県立芸術文化センター 薄井憲二パレエ・コレクション 担当

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町2-22 tel: 0798-68-0223 (代表) fax: 0798-68-0212



Kenji Usui Ballet Collection

薄井憲二 パレエ・コレクション
2020 企画展

「人形たちの饗宴 I ～〈鏡〉を覗くように～」

2020/2/11(Tue.)～2020/3/15(Sun.)

人間創造の物語は、古くはギリシア・ローマ神話に遡り、今日まで様々なヴァリエーションを生み出し続けています。本展で取り上げるパレエは、錬金術から夢を引き継いだ時計仕掛けの人形が、電気の登場で急激に廃れた時代のもので、「理想の女性の創造」という夢の盛衰を映し出しています。世紀をまたぐ4作品——『コッペリア』『人形の精』『風変わりな店』『ペトルーシュカ』——の中で、創造主は人形技師、人形店主、人形遣いへ、被造物はオートマタ(自動人形)からダンサーへと変化します。共通するのは、創造者のヒュプリス(傲慢)が人形たちの反乱をもって報いられ、またそこにパレエの創造と鑑賞をめぐる性別分業が透けて見えるところです。そうした見る者の夢や欲望を映し出す「鏡」としての人形／ダンサーは、私たちに何を投げ掛けているのでしょうか。



『 Coppélia 』

(初演時の正式タイトルは「 Coppélia、または 珙瑯の眼をした娘」)

- [台本] シャルル・ニューテール、アルチュール・サン＝レオン
 - [音楽] レオ・ドリーブ
 - [振付] アルチュール・サン＝レオン
 - [初演] 1870年5月25日 パリ・オペラ座
- スワニルダ:ジュゼッピーナ・ボツァッキ フランツ:ウジェニー・フィオクル

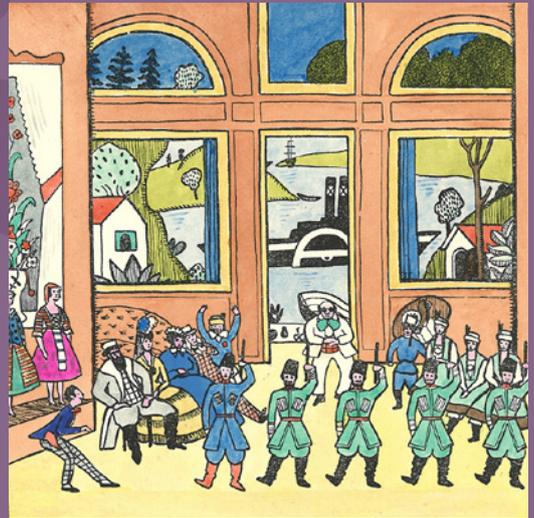
パリ・オペラ座バレエで最も上演数の多い本作は、「人形振り」を演じるプリマバレリーナの変容と、客席に迫る圧巻の群舞を見所とし、広く愛されてきました。若いカップルが不和を乗り越え結婚するお話は、ロマン主義のお約束「越境」の巧みな変奏により、異種婚の悲劇を免れます。ここで活躍するのが、恋人より先に異界へ踏み込んで美しい恋敵を人形と見破り、男たちを夢から覚めさせる勇敢で聡明なヒロインです。彼女の人形／人形師との対決は、書物を奉る精神を躍動する身体がこてんぱんにする、バレエの面目躍如たる振付にも彩られています。このようにして、自動人形に投影されてきたロマン主義の夢を笑い飛ばした本作は、同時に共同体内の結婚という現実にロマンスを振り替えたと言えるのかも知れません。

『 人形の精 』

(Die Puppenfee / The Fairy Doll)

- [台本] ヨーゼフ・ハスライター、フランツ・ガウル
 - [音楽] ヨーゼフ・バイエル
 - [振付] ヨーゼフ・ハスライター
 - [美術] アント・プリオシ
 - [初演] 1888年10月4日 ウィーン帝立・王立宮廷歌劇場
- 人形の精:カミラ・パリエロ 店主:ルイ・フラッパー 助手:ヨーゼフ・ハスライター

チロル地方、スペイン、日本、中国……各種キャラクター・ダンスに、赤ちゃん人形、太鼓ウサギ、プルチネッタ、詩人……。自動人形のアンティーク・コレクションのような本作は、進歩主義の時代に懐古趣味で人気を博したウィーンの宮廷歌劇場時代の代表作。広い範囲でアダプトされ、バレエ・リュスの改作につながった他、モダンダンスが勃興した時代のバレエの流行としても注目されます。お話の舞台は工房ではなく店となり、店主が訪問客に自慢の人形を披露する昼と、閉店後に人形たちが饗宴を繰り広げる夜で、味わいの違う「人形振り」が観客を魅了します。損得勘定の店員と品定め客の前ではごこちない人形たちも、人目のない夜中に「人形の精」に生気を与えられると、生き生きと踊り出すのです。



『 風変わりな店 』

(La Boutique Fantasque / The Fantastic Toy Shop)

- [台本] セルゲイ・ディアギレフ、セルゲイ・グリゴリエフ、アンドレ・ドラン
 - (ヨーゼフ・バイエルのバレエ「人形の精」(1888)に基づく)
 - [音楽] ジョアキーノ・ロッシニ(オットリーノ・レスピーギ編曲)
 - [振付] レオニード・マシーン
 - [美術] アンドレ・ドラン
 - [初演] 1919年6月5日 ロンドン・アルハンブラ劇場
- カンカン・ダンサー:リディア・ロボコフとレオニード・マシーン 店主:エンリコ・チェケッティ

マシーンが改作を夢見てきた「人形の精」は、1888年の初演と同時に世界に広がり、ロシアでは1897年にボリジョイ劇場、1903年にマリンスキー劇場でアダプトされ、今日まで繰り返し改訂されてきました。本作はその舞台と音楽を「人形の精」がインスパイアされた第二帝政期にとり、人形たちの踊りにも地中海の陽気なナンバーを取り入れていきます。世紀末の装飾バレエと一線を画すのは、ドランのシックな美術と、人形カップルの恋を反乱のてこにする筋骨きです。人形の踊りの最後を飾るフレンチ・カンカンのペアは、アメリカとロシアの家族連れ客が取り合いの末、バラバラに売られてしまいます。翌日には引き裂かれてしまうと悲嘆に暮れる2人を、仲間の人形たちは踊りで元気づけ、ついには逃亡を手助けするのです。

『 ペトルーシュカ 』

(Pétrouchka)

- [台本] イーゴリ・ストラヴィンスキー、アレクサンドル・ブノフ
 - [音楽] イーゴリ・ストラヴィンスキー
 - [振付] ミハイル・フォーキン
 - [美術] アレクサンドル・ブノフ
 - [初演] 1911年6月13日 パリ・シャトレ座
- ペトルーシュカ:ワツラフ・ニジンスキー バレリーナ:タマラ・カルサヴィナ
ムーア人:アレクサンドル・オルロフ 香具師(人形小屋の主):エンリコ・チェケッティ

舞台は1830年代の Санктペテルブルクの謝肉祭。賑わう広場の見世物の中、とある人形小屋の表と裏が描き出されます。小屋主の人形遣いはまやかして3つの人形を踊らせ、人々を楽しませます。その裏でペトルーシュカは、囚われの身に苦しみ、バレリーナへの恋に傷つき、果ては恋敵のムーア人に一太刀にされるのですが、たかが人形としか扱われません。ディアギレフとニジンスキーの関係を重ねて見られることの多い本作は、ペトルーシュカが亡霊になったところで幕を閉じます。モダンバレエの傑作とされる音楽と振付は、ストラヴィンスキーの実験とフォーキンの改革を押し進め、古典的秩序を一新する群舞や人形それぞれの性格を象徴するモチーフを見所とし、世界中でたえず上演されてきました。

